

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

ソーシャルワークのグッドプラクティショナーとして、京都府北部にある社会福祉法人みねやま福祉会の榎田啓さんを推薦します。

榎田さんは、全国社会福祉法人経営者協議会が福祉の第一線で活躍する若手を表彰するために2018年に創設された「社会福祉ヒーローズ (HERO'S)」の、初代ベストヒーロー賞を受賞されました。

みねやま福祉会では様々な社会福祉事業を行っていますが、なかでも同法人が運営する「マ・ルート (Ma・RooTs)」という施設での取り組みは、まさに地域に根ざした分野・領域

横断的なソーシャルワークの実践です。「Ma」は「私の」という意味のフランス語で、「Roots」は根源や結びつき、故郷を表します。「マ・ルート」という言葉には、人と人を結びつける「ごちゃまぜ」の根源であり、人々の心のふるさと（居場所）となるようにという願いが込められているとのことです。

この事業の発展はもちろんのこと、榎田さんには、ますますソーシャルワークの魅力や可能性を発信して欲しいと思っています。

(推薦者：同志社大学教授 空閑浩人)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

支え合いの文化を取り戻す ソーシャルワークという仕事

櫛田 啓 (社会福祉法人みねやま福祉会常務理事)

【「早く死にたいです。」】

家で妻とのんびり過ごしていた休日の夜、電話が鳴りました。「すぐに来てください。」と言われ施設に向かいました。もう15年以上も前になりますが、私が児童養護施設で児童指導員として働いていた時の話です。

施設に着くと粉々になったガラスが散乱する部屋で14歳の少年がこちらを睨みつけていました。少年は「もう誰も信じない。」と言って空き瓶を壁に投げつけます。そうやってもう何十本もの空き瓶を投げつけていました。部屋に入ろうとするとこちらへ瓶を投げつけようと威嚇してきます。そんな彼に私は「もうすぐ誕生日だね。今年の誕生日は何をしてお祝いしようかな。」と声をかけました。「殺すぞ。」と叫ぶ少年に一瞬の気の緩みが伺え、私は続けました。彼が産まれた時の事、いじめられた時の事、お父さんとお母さんが離婚した時の事、はじめて施設にやって来た日の事、まだ14年の人生だけど、君は本当によく頑張っていると労いました。そして最後に「僕は君に出会えて本当に幸せだ。」と伝えると、少年はその場に泣き崩れました。いじめや家庭内暴力、父母の離婚と安心できる居場所がなかった彼は、人に愛されたいという想いをうまく表現できず反社会的な行動を繰り返し、地域から追い出され、12歳で児童養護施設にやってきました。彼の傷の中で最も深かったのが地域からの排除でした。

親に見離され、地域からも見離された少年の「もう誰も信じない。」という言葉は「誰からも愛してもらえない。」という悲痛の叫びでした。

その少年が10歳の時、小学校の授業で書いた将来の夢は「早く死にたいです」でした。

【誰もが暮らしやすい地域づくりに挑戦】

私が勤務している社会福祉法人みねやま福祉会は、「海の京都」で知られる京都府最北端のまち、丹後地域を中心に活動しています。1950年、戦災孤児の受け入れから始まった私たちの法人では「地域の人々の暮らしの困りごとを解決する」というミッションを掲げ、地域の皆様と共に歩んできた歴史があります。しかし近年は、少子高齢化や都市部への人口流出による人口減少により、産業の担い手不足や若い世代の減少等、地域の活力低下が著しい現状があります。私たちは、魅力溢れる丹後地域を誰もが暮らしやすい地域にしたいという想いをもち、持続可能なまちづくりに福祉の領域から挑戦しています。

【見えないものが見え、聴こえない声が聴こえる】

当法人が運営しているマ・ルートという施設は、特別養護老人ホーム、こども園、障害者施設の複合型で、そこでは分野の縦割りを越境する「ごちゃまぜの福祉」を実践しています。ある日、

この施設で事件が起きました。障害施設のサービスを利用する15歳の男の子は、重度の自閉症で会話でのコミュニケーションは難しく、陶器やグラス等、割れるものを見ると割ってしまいます。感情コントロールが難しく、大声で奇声をあげることもしばしばあります。大柄で女性スタッフが動きを制止しようとしてもなかなか止められません。お母さんと支援学校の先生からは人を傷つけてしまう可能性があるので小さい子どもを男の子に近づけないでほしいと言われていました。それでも、ごちゃまぜのマ・ルートではラウンジで幼児が走り回り、食事の時間となると大勢の人が集まってきました。ある日、男の子が食器を投げ割り、破片が飛び散り、幼児が足の裏をケガしてしまいました。

あなたならこのような問題を解決するためにどうしますか？

私たちも真剣に考えました。割れそうな物を撤去する、男の子は陶器の食器を使わない、スタッフがマンツーマンで付く、男の子は人がたくさん集まるラウンジで過ごさない、小さな子どもを男の子に近づけない、男の子が個室で過ごせるように工夫する等々、一般的にはこのような意見が出てくるかもしれません。しかし、これらは見えている事象にのみアプローチをする「対処療法」であり、問題の本質を捉えていません。したがって、問題が起きないように管理することはできても、根本を解決できていないので管理しないとまた同じ問題が起きてしまいます。ここで大切なことは、この男の子が「なぜ物を割るのか」ということを考えることです。それでは一緒に考えてみましょう。自閉症だから、会話でのコミュニケーションが難しいから、物を割ることで何か伝えようとしている。さらに掘り下げます。お母さんは必死に男の子を育ててきたが疲れきってしまっている、男の子はいつも個室に入れられ一人ぼっちで寂しい思いをして日々を過ごしていた、パニックになって部屋の窓ガラスを割ってしまった時に慌ててお母さんが部屋にやってきた、そしてこの日から男の子は一人ぼっちだと感じると物を割るようになった。ここまでくると、先ほどの対処療

法とは違った支援が考えられます。お母さんへの支援と母子マッチングの支援をすることによって、しばらくすると男の子が物を割ることはなくなりました。

このように、私たちはどうしても、危険行為や暴力、暴言、対人トラブル等、見えている現象や行動、出来事に注目してしまいがちです。しかし、本当に大切なことは、その問題行動にはどのようなパターンや構成要素があり、その背景要因はどのような構造になっているのかという見えない部分を見える化することです。これこそが、ソーシャルワークの醍醐味であります。相模原障害者施設殺傷事件の犯人が「意思疎通の取れない障害者が社会にとって迷惑だ。」と言ったことに私は強い違和感を抱きました。ソーシャルワーカーの専門性を持ってすれば、目の前で起きている事実との因果関係を分析し、背景要因を見える化することができます。つまり、見えないものが見え、聴こえない声が聴こえるはずです。それはシンプルに、目には見えない困り事を見ようとする、声にならない声を聴こうとするからできるのだと思います。

【みんなで生きる】

その昔、丹後地域の山奥の村では、村中の家の名前が順番に書かれた回覧板があり、一日ごとに次の家へと回されていきました。その回覧板が回ってきた家の人は独居で生活しているお年寄りの家に行って、身の回りのお世話をしていました。介護を他人事にせず、村全体の課題として受け止め、リスクを分散して共倒れを防ぐ知恵がこの村にはあり、それが昭和二十年頃まで当たり前に行われていました。

戦時中は働き盛りの青年のほとんどが戦地に駆り出され、当時の労働力不足は深刻だったようです。それでも、暮らしに余裕がない中でも、村人たちが協力を惜しまなかったのは、代々、村に伝わってきた支え合いの習慣が強く残っていたこと、そしてもう一つは、村全体で責任を持って看取ることがシステムとして成り立っていたためだ

とされています。

医者も居ない、電話もない、役所もない、そんな不便な山奥の村には、人々が支え合って、みんなで生きる文化が根付いていました。

【支え合いの文化を取り戻す】

平成の時代は、テロや災害が相次ぎ、決して平らかに成るとは言えない30年でした。多様化する価値観の中で企業や国の競争は激化し、失敗した人は見捨てられる支え合いを喪失した社会に生き辛さを抱いた人は少なくないと思います。

技術革新による輝かしい未来がすぐそこまできている一方で、私たちが先送りにはしてはならない本質的な課題とは、いかにして、この社会に支え合いの文化を取り戻すかだと思います。広がりつつある貧困、排除の構造に歯止めをかけ、人と人が良好な縁で支え合う、失敗に寛容な社会を構築

するのもソーシャルワーカーの仕事だと私は考えています。見えないものが見え、聴こえない声が聴こえるソーシャルワークの力がこれからの日本を救うのだと信じています。

冒頭のエピソードに出てきた児童養護施設の少年ですが、15歳の誕生日は我が家にて妻の手料理でお祝いしました。普段はツンとした目つきの少年もこの日は目尻が下がって照れくさそうにしていました。少年が20歳になった時、一緒に食事に行きました。帰り際に彼が私を呼び止めて言いました。

「俺みたいな奴を見捨てないでいてくれてありがとう。俺、今は生きてて良かったって思えるようになったから。」

とても嬉しい出来事でした。それでも心配は尽きませんが、私は彼に出会えて本当に良かったと心から思っています。